

究のフロンティア』(国際基督教大学日本研究プログラム), 2010年, 85
-101頁

文化史・文化理論の再構築

研究代表者 佐々木 充

1. プロジェクトメンバー

福 沢 榮 司
佐々木 充
三 浦 淳
齋 藤 陽 一
猪 俣 賢 司
逸 見 龍 生
北 野 圭 介 (2004年度~2005年度)
番 場 俊
石 田 美 紀 (2007年度~現在)

2. プロジェクト概略

文学, 演劇から映画, アニメに至る多様な表象文化を対象とする「文化コミュニケーション論」の研究活動が開始されて10年が経過したが, 各表現媒体の特性の解明や, テキスト分析の精緻化をすすめていくなかで, 一種の停滞感・閉塞感が感じられてきていた。その主たる原因は, これまでの研究教育が精神分析, 構造主義, 記号論からフェミニズム, ポストモダンに至る現代文学・文化理論の導入と応用という形で行なわれ, 研究者自身の拠って立つ文化的基盤を省みた理論的研究の樹立に向けた取り組みが不十分であったこと, また, 個々

のテキストの特異性やメディアの固有性に目を奪われるあまり、テキストを産出する行為の水準、複数のメディアの相互関係、文化の産出と消費のあり方をグローバルに規定しているネットワークの変容といった、より動的な側面に対する意識が稀薄であったことに起因していると考えられた。こうした考察を前提にして文学理論、文化理論を再検討し、自己の知的・学問的関心の所在を見据えつつ、動的な文化史・文化理論の再構築を本プロジェクトはめざしている。

3. プロジェクトの成果

2004年度

【研究会】

講師：シンガポール国立大学坂本伝助教授「現代日本建築と映像表象の関係について」(平成17年1月21日、司会北野圭介)

【論文】

北野圭介「ニュー・メディア、オールド・メディア」『アメリカ研究』、2005年、63-83頁。

番場俊「『罪と罰』と同時代のジャーナリズム」『新潟大学言語文化研究』第10号、1-14頁。

逸見龍生「『百科全書』を読む一本文研究の概観と展望」『欧米の言語・社会・文化』第11号、39-92頁。

佐々木充「ポエジーと文体の〈声〉におけるオートポイエーシス」『システムズアプローチの適用による文学研究』平成16年度科学研究費補助金(萌芽研究)研究成果報告書平成17年3月、1-39頁。

斉藤陽一「日本人論としての野田秀樹『贖作・罪と罰』」『欧米の言語・社会・文化』第11号、19-37頁。

2005年度

【研究会】

3月8-9日に北海道大学スラブ研究センターとの共催で公開研究会「テキストと身体」を開催。

【著書】

- 1) 佐々木充『深読みシェークスピア——『真夏の夜の夢』と月のフォークロア』新潟日報事業社, 2005年
- 2) 北野圭介『日本映画はアメリカでどう見られてきたか』平凡社新書, 2005年
- 3) 番場俊「顔貌と視線」栗原隆編『大学における共通知』東北大学出版会, 2005年5月, 54-64頁。

【論文】

- 1) 三浦淳「鯨イルカ・イデオロギーを考える(I)——藤原英司の場合(1)」, 『人文科学研究第117輯』, 2005年9月, Y43-66頁。
- 2) 逸見龍生「書物としての『百科全書』——十八世紀ヨーロッパ『百科全書』異本ネットワーク」, 『欧米の言語・社会・文化』第12号, 2006年3月, 1-18頁。
- 3) 佐々木充「初期マラルメにおけるオートポイエシス」, 『表現文化研究』第2号, 2006年3月, 21-40頁。
- 4) 番場俊「19世紀小説と現在」, 『19世紀ロシア文学という現在』(北海道大学スラブ研究センター21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No. 10), 2005年, 115-129頁。
- 5) 番場俊「告白する身体」, 『新潟大学言語文化研究』第11号, 2006年3月, 1-16頁。

2006年度

【著書】

- 1) 番場俊(共著), 栗原隆編『芸術の始まる時, 尽きる時』東北大学出版会, 2007年3月(「言葉の受肉, あるいは記号論の複数の可能性について」107-127頁を担当)

【論文】

- 1) 佐々木充「初期マラルメにおけるオートポイエシス(2)」, 『表現文化研究』第3号(新潟大学大学院現代社会研究科発行, 2007年3月), 39-57

頁。

- 2) 三浦淳「鯨イルカ・イデオロギーを考える(Ⅱ)——藤原英司の場合(その2)」, 『人文科学研究』第119輯, 2006年11月, 111-134頁。
- 3) 齋藤陽一「日本における『三人姉妹』の上演をめぐる」, 『テキストと身体』北海道大学スラブ研究センター21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No. 19, 2007年3月, 60-75頁。
- 4) 猪俣賢司「空想と精密描写の詩学——古典詩学から特撮映像論へ」, 『人文科学研究』第119輯, 2006年11月, 135-161頁。
- 5) 猪俣賢司「帝国の残映とゴジラ映画——爆撃機の特撮映像論」, 『人文科学研究』第120輯, 2007年3月, 79-102頁。
- 6) 逸見龍生「デイドロ執筆項目「『靈魂』補遺」——『百科全書』本文校訂の試み」, 2006年12月, 『藝文研究』第91号, 45-66頁。

2007年度

【研究会】

「表現文化研究フォーラム」(2007年6月20日開催・佐々木充司会)。

発表: 石田美紀「ハリウッド映画に対する勝利と敗北——イタリア無声映画『カピリア』を中心に——」

「表現文化研究フォーラム」(2008年2月20日・佐々木充司会)。

発表: 猪俣賢司「南洋史観とゴジラ映画——皇国日本の幻想地理学——」

【著書】

番場俊・乗松亨平・北野圭介(共同討議)「ヤンポリスキー来日のあとで」, ミハイル・ヤンポリスキー『隠喩・神話・事実性——ミハイル・ヤンポリスキー日本講演集』平松潤奈・乗松亨平・畠山宗明訳, 水声社, 2007年, 141-189頁。

石田美紀「第四章 新しい身体と場所——映画史における『ロード・オブ・ザ・リング』三部作」藤井仁子(編著)『入門・現代ハリウッド映画講義』, 人文書院, 2008年, 95-119頁。

【論文】

- (1) 佐々木 充「『ハムレット』における想起の技法—ロレンス・オリヴィエ監督・主演の映画『ハムレット』(1948)—」『英文学会誌』第三十号, 2007年12月, 43-58頁。
- (2) 三浦淳「鯨イルカ・イデオロギーを考える(Ⅲ)——ジャック・マイヨールの場合——」『人文科学研究』第121輯, 2007年10月, Y67-90頁。
- (3) 猪俣賢司「南洋群島とインファント島—帝国日本の南洋航空路とモスラの映像詩学—」『人文科学研究』, 第121輯, 2007年10月, 91-123頁。
- (4) 石田美紀「響きと吐息〈声のBL〉という申し開きのできない快樂について」『ユリイカ』39巻16号, 青土社, 2007年, 190-196頁。
- (5) 番場俊「スタヴローギンの告白?——『悪霊』論の手前で」, 『ユリイカ』2007年11月号, 111-117頁。

2008年度

【著書】

- ・逸見龍生:野沢協監訳, 逸見龍生ほか訳『啓蒙の地下文書』, 共訳, 2008年10月, 法政大学出版局(訳と注解, 解題)。
- ・番場俊「絵画の始まりと終わり, そして顔の出現と消滅について——イコンからマレーヴィチへ」, 栗原隆(編著)『形と空間のなかの私』東北大学出版会, 2008年4月, 305-323頁。
- ・番場俊「表象文化論——イメージ/テキスト/身体の夢」, 栗原隆(編著)『人文学の生まれるところ』東北大学出版会, 2009年3月, 91-108頁。
- ・石田美紀「物語映画における「私」の位置」, 栗原隆(編著)『形と空間のなかの私』東北大学出版会, 2008年5月, 287-304頁。
- ・石田美紀『密やかな教育〈やおい・ボーイズラブ前史〉』洛北出版, 2008年11月。
- ・石田美紀「女たちの絆—退団後の天海祐希と「キャリアウーマン」たち」, 青弓社編集部編『宝塚という装置』, 青弓社, 2009年3月, 258-279頁。
- ・石田美紀「映像文化論—ホラー映画『女優霊』と原初の映像」, 栗原隆編

『人文学の生まれるところ』, 東北大学出版会, 2009年3月, 299-316頁。

【論文】

- ・佐々木 充 「小林秀雄の近代批評—誤訳とずらしの手法について—」, 『人文科学研究』, 第124輯, 2009年12月3月, 75-104頁。
- ・佐々木 充 「シェイクスピアはロマン派?—19世紀前半におけるシェイクスピア—」, 『19世紀学研究』, 第3号, 2009年3月, 103-118頁。
- ・三浦淳 「鯨イルカ・イデオロギーを考える (IV) —— ジョン・C・リリーの場合 ——」 『人文科学研究第122輯』 2008年7月 (Y113~134ページ)。
- ・齋藤陽一 「スタニスラフスキー・システムをめぐる一考察」 『人文科学研究』 第124輯, 27-43頁。
- ・猪俣賢司 「東京の地理学と小津安二郎の映画技法—鉄道路線とゴジラ映画の視覚から—」, 新潟大学人文学部研究紀要『人文科学研究』, 第124輯, 2009年3月31日, 45-73頁。
- ・猪俣賢司 「南洋史観とゴジラ映画史—皇国日本の幻想地理学と福永武彦のインファント島—」, 新潟大学人文学部研究紀要『人文科学研究』, 第123輯, 2008年10月30日, 81-111頁。
- ・猪俣賢司 「もう一つの南洋と望郷の日本—サンダカンとアナタハンからの鎮魂歌—」, 新潟大学人文学部紀要『人文科学研究』, 第122輯, 2008年7月3日, 135-158頁。
- ・逸見龍生 「『百科全書』研究の新地平」 『日本18世紀学会年報』 第23号, 2008年, 8-10頁。
- ・逸見龍生 「「検討」概念の生成と構造——十八世紀哲学的地下文書『宗教の検討』について——」 『人文科学研究』 第124輯, 2009年3月, 91-109頁。
- ・石田美紀 「「ヒューマニズム」と「センチメンタリズム」のすぐそばで—『A.I.』と『アミスタッド』」, 『ユリイカ』 2008年7月号, 112-119頁。
- ・石田美紀 「「中の人」になる—〈声もどき (ボーカロイド)〉が可能にしたもの」, 『ユリイカ』 2008年12月臨時増刊号, 88-94頁。

2009年度

【著書】

- ・佐々木充「エクリチュールの〈声〉—小林秀雄の文章を中心に—」高木裕（編著）『〈声〉とテキストの射程』知泉書館，2010年，159-191頁。
- ・三浦淳『鯨とイルカの文化政治学』洋泉社，2009年，301頁。
- ・斎藤陽一「身体表現を養う——演劇を通じた授業の試み」『空間と形に感応する身体』（栗原隆他編）東北大学出版会 2010年3月，89-113頁。
- ・石田美紀「美に抗うアニメーション——セーラームーン以降の美少女アクション」四方田犬彦 鷺谷花（編著）『戦う女たち—日本映画の女性アクション』作品社，2009年，307-337頁。
- ・石田美紀「〈声〉から〈声もどき〉へ——複製技術時代の人造人間」高木裕（編著）『〈声〉とテキストの射程』知泉書館，2010年，325-346頁。

【論文】

- ・佐々木 充「大伴家持「絶唱三首」の近代性について—窪田空穂による家持発見をめぐる—」『人文科学研究』，第126輯，2010年2月，T53-80頁。
- ・猪俣賢司「有楽町高架線と南下する隅田川—ゴジラ映画と小津安二郎の描く「郷愁の東京」1950年代—」，『人文科学研究』，第125輯，2009年9月，81-115頁。
- ・猪俣賢司「品川埠頭のドラマトゥルギー—東京湾岸を繞るゴジラ映画史と小津安二郎の東京トワイライト—」，『人文科学研究』，第126輯，2010年2月，101-133頁。
- ・Tatsuo HEMMI, et al., "Informatiser l'Encyclopédie", Recherches sur Diderot et l'Encyclopédie, n. 43, octobre 2009, pp. 241-242 (共著, 査読つき)
- ・Tatsuo HEMMI, "Réorganisation des savoirs dans l'Encyclopédie. Sur un article de Diderot", 『フランス文化研究』（新潟大学大学院現代社会文化研究科）第3号，2010年3月，39-49頁。
- ・番場俊「写真からドストエフスキーへ」，『ecce [エチェ]—映像と批評』1，森話社，2009年，106-119頁。

- ・番場俊「『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトロヴィチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察」、『現代思想』2010年4月臨時増刊号、286-297頁。
- ・石田美紀「〈歓待の作法〉の失効——タランティーノ映画の変遷と女たち」『ユリイカ』青土社、2009年12月号、82-90頁。

19世紀学研究

研究代表者 松 本 彰

1. プロジェクトメンバー

松本（代表）： 石田，井山，金山，城戸，桑原，鈴木正美，高木，高橋秀樹，錦，逸見，細田，三浦，宮崎裕助

2. プロジェクト概略

人文学部研究プロジェクト「19世紀学研究」は2009年度に新たに立ち上がったプロジェクトであり、学系コア・ステーション Institute for the Study of the 19th Century Scholarship と19世紀学学会と共同で研究活動を行うものである。

3. プロジェクトの成果（平成21年度中に行ったシンポジウム，成果発表等）

本年度は、以下の通り3回のシンポジウム（内1回 国際シンポジウム）と1回の講演会を開催した。

○シンポジウム

- ・「神秘主義と近代」（2009年11月28日）
- ・「近代とミュージアムの成立」（2010年1月9日）
 - ・（国際シンポジウム）「ヨーロッパ・半島・日本—新しい「文化学」の